

2 1 世紀の日本のかたち（4 2）

東日本大震災の復興に向けて（3） —岩手県復興ビジョン—



戸沼幸市
〈(財)日本開発構想研究所 理事長〉

1. 2011年、津波太郎「田老」の風景

6月初旬の昼下がり、今度の3.11大地震津波によって壊滅的に被災した宮古市・田老地区の湾岸に立ち尽くしました。

田老が誇っていた高さ10m、厚さ3mの海寄りの防潮堤は大きく破壊され、市街地や漁港は跡形もなくなっておりました。3ヶ月経って瓦礫はよほど片付けられており、大津波による惨状はすっかり消えており、この日、見渡すかぎり嘘のように人っ子ひとり居ないのです。

この田老湾岸に向かって、岩礁の三陸海岸の入江から巨大な津波が来たのかと想像しつつも、この穏やかな海はなんとしたことでしょう。異臭、悪臭も消え、磯の香りすらするのです。

1000年前に遡れば、貞観11(869)年の大地震津波以来、中世、近世を通して間断なく地震と連動して大津波が襲ったと記録されております。

そして近現代、明治29(1896)年6月15日の明治三陸津波、昭和8(1933)年3月3日の昭和三陸津波、平成23(2011)年3月11日、巨大地震津波が三陸を強襲し、海を生活の領域とする三陸の集落、村、町、市街地を破壊、壊滅させました。

この中でも田老地区は全ての三陸地震津波を正面から受け、悲惨な状況に陥りました。明治三陸津波では、全人口の約4分の三にあたる1,859人が死者行方不明となり、一家全滅が130戸と大惨事でした。平田集落では生存者はわずか36人でした。昭和三陸津波では死者行方不明911人、一家全滅66戸、漁船流失909隻の甚大な被害でした。しかし田老は「津波太郎(田老)」と呼ばれるほど、津波の辛酸を舐めてきた町ですが、不死鳥のように立ち直り、日本一の防潮堤を造り、大津波に立ち向かう構えを築いてきたはずでした。

海岸線と山側に「万里の長城」とも呼ばれた高さ10m、全長2.4kmの堤防を二重に築き、加えて避難所、避難道路、防潮林、警報設備と、目一杯の防津波対策を講じておりました。

これによって昭和35(1960)年のチリ地震津波、昭和43(1968)年の十勝沖地震による津波を押しとどめてきたのです。

しかし、今回の3.11大津波は10mを超え想定外でした。無念にも大自然はこれをもねじ伏せてしまったのです。(田老地区を含む宮古市の被災は、死者417人、行方不明者355人、避難者数1,612人、住宅、建物被害(全・半壊数)4,675棟。6月11日15時岩手県発表)

今、この静かになった田老の海辺に立ち尽

くし、津波年代毎に死者の層を重ねて何事もなく振る舞っている大自然とは、人間の自然との共生とは、如何なることかと自問したことでした。

去り際、三陸の入り江からこちら田老めがけて時速115kmの巨大津波、海の壁が突然襲いかかってくると想像した時、言いしれぬ恐怖に襲われ、ギョッとして田老を離れたことでした。

田老の後、立ち寄った宮古の漁港、海岸も半壊状態でした。

漁船ほぼ全滅(2,774隻中2,600隻が破損消失、沖に出ていた174隻がかろうじて助かる)、定置網もほぼ全滅(19ヶ所のうち、16ヶ所がダメージ、3ヶ所のみ助かる)、養殖(わかめ、昆布、帆立)など漁業施設、漁港施設も壊滅。漁業も人もやられて茫然自失していると宮古市の職員の方が話してくれました。

宮古市に隣接している山田町も手ひどく打撃を受け(死者547人、行方不明380人、住宅2,510棟倒壊)、山田湾岸一带ははまだ瓦礫も片付いていない状況でした。人が消え廃墟となった海岸に夥しいウミネコが大量に繁殖し、巣作りをしている光景は不気味に異様なものでした。ヒッチコックの恐怖映画「鳥」の場面が重なります。

岩手県では①壊滅的な被害を受け、集落、都市機能をほとんど喪失した地域：宮古市(田老海岸、田老漁港海岸)、山田町(山田漁港海岸)、大槌町(大槌漁港海岸)、陸前高田市(高田海岸)、②臨海部の市街地が被災、後背地は残存：野田村、宮古市(宮古港海岸-藤原地区、鉾ヶ崎地区)、釜石市、大船渡市、③臨海部の

集落中心に被災、市街地は残存：久慈市、田野畑村、岩泉町、④防災施設等の後背地はほとんどない地域：洋野町、普代村。と分類しております。

2. 岩手県復興ビジョン

岩手県では3.11の地震によって発生した大津波が三陸沿岸各地に想像を絶する壊滅的被害をもたらしたことを受け、4月11日に第1回岩手県東日本大震災津波復興委員会(委員長・藤井克己岩手大学長)を4月11日に立上げ被災現地の調査に合わせ、復興計画の策定に着手しました。そして、6月7日に復興の目指す姿として「いのちを守り/海と大地と共に生きる/ふるさと岩手・三陸の創造」を掲げ、復興に向け、(1)「安全」の確保、(2)「暮らし」の再建、(3)「なりわい」の再生を3つの原則とする復興基本計画案を了承。

津波対策の基本的考え方は「再び人命が失われることがない多重防災型まちづくりと防災文化を醸成し、継承すること」を目指としています。計画期間は平成23年度～30年度の概ね8年間。

- (1)「安全」の確保—概ね百数十年程度で起こりうる津波の高さを想定、減災に取り組む
- ・多重防災のための骨格的防災施設、避難施設づくりと土地利用の誘導
- ・避難計画と情報通信網の整備
- ・防災まちづくり—津波防災の分類と復興パターン

回避型：大津波でも浸水しない安全地帯に移転する。

分散型：^{へさき}舳先型に防災施設等を配置して津波エネルギーを逃して市街地を守る。

抑制型：第一線の防災施設に加え、道路や鉄道などの嵩上げで津波エネルギーを減衰させて壊滅的被害を防ぐ。

(2) 「暮らし」の再生

- ・生活再建：被災者の生活再建への支援、被災地域の雇用維持、就業支援。
- ・保険医療・福祉：保健医療・福祉提供体制の整備、健康の維持・増進、こころのケアの推進、要保護児童等への支援。
- ・教育・文化：防災文化、震災の記憶の語り継ぎ、防災教育につなげる。
- ・地域コミュニティ：コミュニティの再生・活性化。
- ・市町村行政機能：行政サービスの回復。

(3) 「なりわい」の再生

- ・水産業・農林業：
 - 漁業協同組合を核とした漁業、養殖業の構築
 - 産地魚市場を核とした流通・加工体制の構築
 - 漁港等の整備
 - 地域特性を生かした農業の実現
- ・経済産業：
 - 中小企業への再建支援と復興に向けた取り組み
 - ものづくり産業の新生
 - 産業の復興を支える交通ネットワーク等の構築
- ・観光：
 - 観光資源の再生と新たな魅力の創造
 - 復興の動きと連動した全県の誘客への取り組み

検討されている岩手県復興計画は6月中旬に原案をまとめ9月中には実施計画に結びつけることとしています。

6月初旬、岩手県下のいくつかの被災地を訪ねた後、県庁に立ち寄って以上の復興計画について伺いながら、以下のような思いつき

がありました。

三陸漁業の再生

岩手県にあつては打撃を受けた三陸海岸の再生、とりもなおさず漁業、水産業の再生が中心的課題に違いありません。

漁業集落において高齢化の中で後継者難もあり、家族経営的に行われている漁業は今、各所に大きな痛手を受け、やむを得ずに廃業に追い込まれるケースが目立っております。三陸海岸の漁業の再生にはスピードを要すると、県、市の水産関係者が話しておりました。早急に「漁業特区」を設定し、国の支援、民間の支援、税の優遇をして、三陸の漁業を再生してほしいものです。

民間の小口資金を集め、地元漁業者と共同経営体をつくる、大消費地、都市からの大口の民間資金を世界有数の漁場の再生に注ぎ込むことがあっても良いのではないかと。

三陸海岸各地の漁業協同組合として、短期的、中期的、長期的漁業再生にむけて懐を深くして立ち向かってほしいと願います。

東北学・岩手学をベースとした学習観光計画

岩手県は、観光も産業の一つの柱です。大地震津波からの東北・岩手の再生の姿はそのまま防災文化の格好な学習の場です。東京人をはじめ、日本各地からNPO、ボランティアに混じって被災地を実際に見聞することは、この情報社会時代にあつては子供たちにも大人にもどれほど有意義なことであることか。

日本各地で地域学が盛んに行われておりますが、早稲田大学では社会人向けプログラムとして様々な講座を設けておりますが、この中に私が主催している地域学の一つとして

「新宿学」があります。これを広げて、「東北学・岩手学」を岩手県の大学コンソーシアムと連携し、開設できないかと考えております。

3. 東北・岩手学

岩手県は東北にあって存在感のある地域です。北東北の太平洋側に位置する釣鐘型、南北195km、東西123km、面積は15,278km²、ほぼ四国と同じ、北海道に次ぐ全国2位の広さです。人口は1,327,153人(平成23年3月1日)、人口分布はまず奥羽山脈と北上高地に挟まれた北上川縦谷盆地に主要な都市、一関(平泉)、奥州、北上、花巻、盛岡(県都)、一戸が南北に連なっております。

そして、陸奥、陸中、陸前の三地域にまたがる三陸沿岸に海を生活領域とする集落、村、町、都市が築かれてきたのです。

宮古以北の隆起海岸、200mを超える海岸段丘が発達、豪壮な断崖と岩礁風景が連続し、宮古以南のリアス式沈降海岸は、数多くの湾と岬が交互に連続しております。三陸海岸は海が陸に刻んだ大自然の景観です。

陸中海岸は、アカマツ、タブノキ、シロバナシャクナゲの群生地であり、ウミネコの棲息地域です。

黒潮と親潮の交じる三陸沖はマグロ、カジキ、カツオ、サンマ、イカ、サバ、イワシ等々、世界三大漁場の一つであり、沿岸ではアワビ、ワカメ、コンブ、ホタテなどの養殖が盛んに行われておりました。ここ三陸は度々の大津波に襲われながら人間居住を築いてきました。この人間の切実な営みについて考えることも「岩手学」の一課題に違いありません。

岩手県は森と海に生活の拠点を築いてきた縄文以来、自然と共生する独特な歴史を持つ

ています。

伊達の宮城県とは一味異なる岩手県の領域は昔から奥州の一つの拠点でした。1000年の昔、奥州藤原氏は4代(1087~1189)にわたって、東北の地に「北の都、平泉」を打ち立てました。平泉は先日、中尊寺など、寺や庭園が「浄土」としてユネスコ世界遺産に登録される見通しと報じられています。話は飛躍しますが、将来、東北州が実現したときには、州都「平泉」案もあると思うのです。

「東北・岩手学」では柳田国男の「遠野物語」、宮澤賢治の「イーハトーブ」、そして3.11の大地震津波災害の復旧復興過程を取り上げる「防災文化論」をテーマとしたいものです。

「いっしょに育む希望郷いわて」は岩手県長期計画(平成21年度~30年度)の表題です。東北・岩手県が宮城県、福島県と共にこの度の大震災を乗り越えて力強い生命の網の目社会を育ててほしいと願います。

【参考文献】

1. 「平成23年東北地方太平洋沖地震及び津波災害に関する被害状況及び技術的考察」岩手県3.11災害関係資料
2. 「岩手県東日本大震災津波復興計画 復興基本計画案」岩手県(平成23年6月)
3. 「いわて県民計画(平成21年度~平成30年度)」岩手県
4. 「日本の都道府県別将来人口推計(平成19年5月推計)」(独)社会保障・人口問題研究所
5. 「三陸海岸大津波」吉村昭(文春文庫)

【写真】

- 写真-1 田老海岸、田老漁港海岸(参考資料1より)
写真-2 山田町(参考資料1より)

(2011.06.15)

写真-1

①壊滅的な被害を受け、集落、都市機能をほとんど喪失した地域

宮古市(田老海岸、田老漁港海岸)

【被災前】



【被災後】

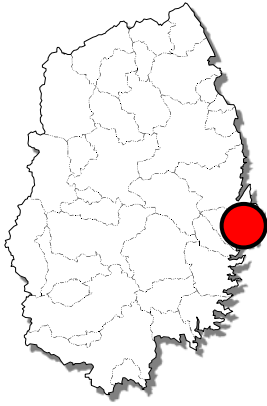


写真-2

①壊滅的な被害を受け、集落、都市機能をほとんど喪失した地域

【被災前】

山田町(山田漁港海岸)



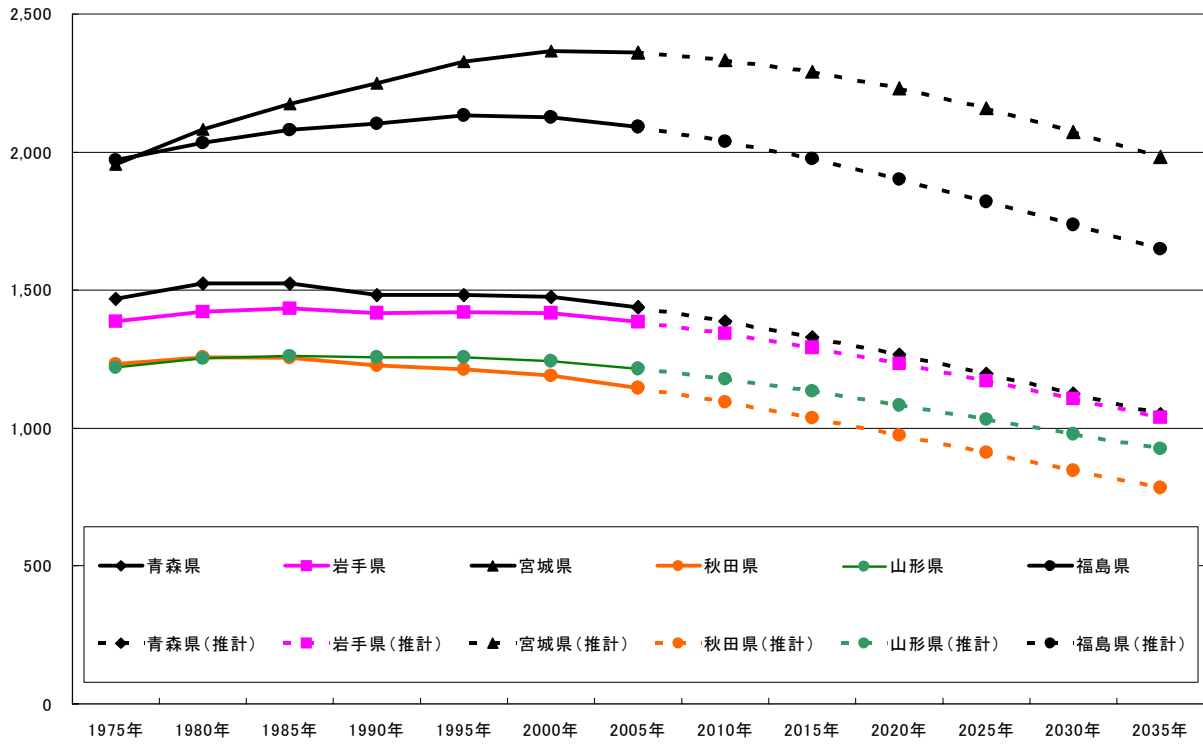
【被災後】



資料:「平成23年東北地方太平洋沖地震及び津波災害に関する被害状況及び技術的な考察【状況写真】」

東北6県の将来人口推計

人口単位：千人



資料：「日本の都道府県別将来人口推計(平成19年5月推計)」(独)社会保障・人口問題研究所

注：実線は、1970年～2005年の実績値

破線は、2010年～2035年の推計値